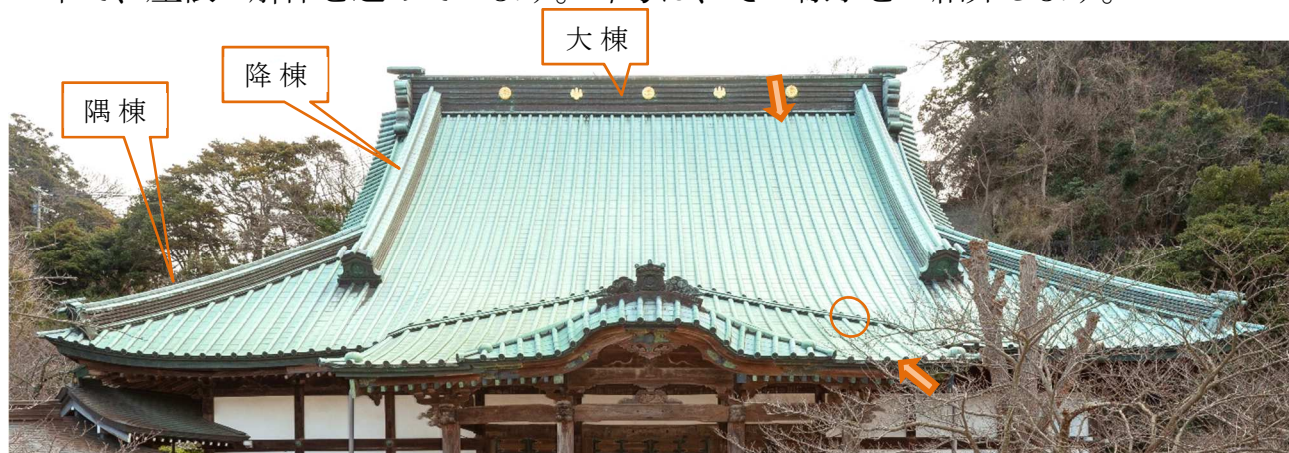


重要文化財 光明寺本堂（大殿）は保存活用 修理工事（半解体修理）を行っています。

（令和4年2月28日発行）



2019（令和元）年11月から進めている本堂（大殿）保存活用修理工事は、現在（2022.2.28）、昨秋出来上がった素屋根（本堂をすっぽり覆う建屋）の中で、屋根の解体を進めています。今号は、その様子をご紹介します。



修理前の屋根は、^{いちじゅう}一重、^{いりもやぞう}入母屋造、^{ごはい3けん}向拝3間、^{のきからはふつき}軒唐破風付、^{かわらぼうどうばんぶき}瓦棒銅板葺という形式で、緑青色がきれいな屋根でしたが、前回屋根を葺き替えた昭和46年から50年余りが経過し、雨漏りがおきていました。

解体に先立ち、まず現在の屋根の曲線の実測（型取り）からはじめます。



やだるみ
正面屋根の屋垂み実測

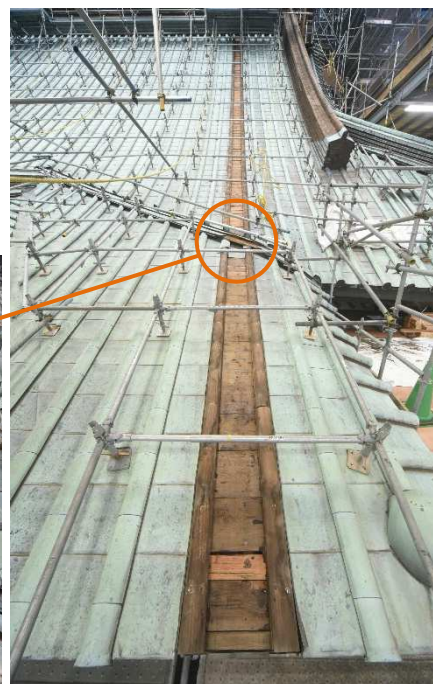


向拝の軒唐破風曲線実測

次に、^{したじ}下地の様子を確認するために、縦に^{したじ}一列の屋根銅板を剥しました。(修理前写真  印の列)。

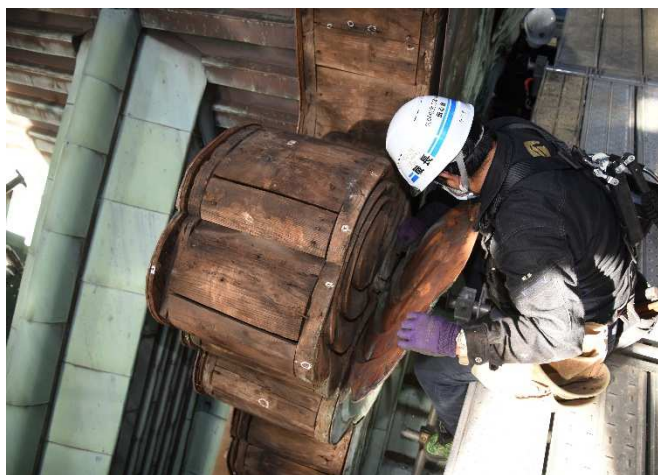
向拝の上・下 (同  印内) で少し様子が違う事がわかります。

下側の板には隙間が無くぴったりと張り詰められていますが、上側には少し隙間があります。

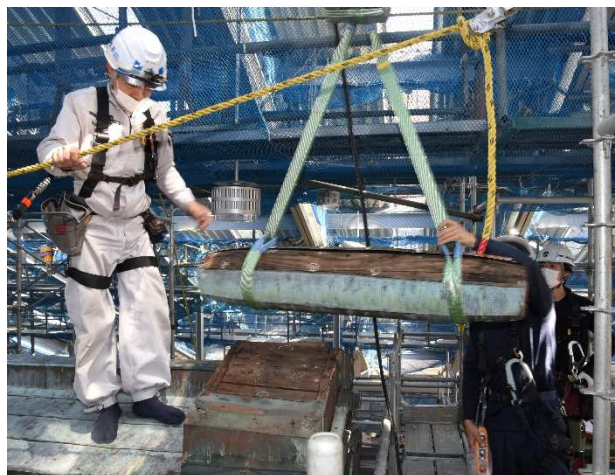


^{おおむね}銅板取り外し前の大棟です。

両端の、 ^{おにいた}が鬼板、 ^{きょうのまき}内に3本ずつの経の巻



鬼板の銅板取り外し



経の巻の取り外し

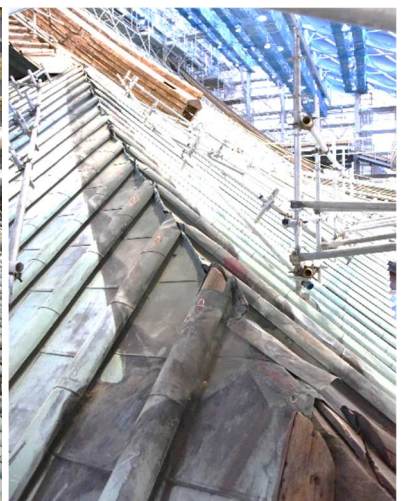
大棟の銅板取り外し 木材を箱状に組んだ外型に銅板を張った形式で、銅板の取り外しは人の手で、一枚ずつ、壊すことの無いよう丁寧に行います。大棟の高さは1.7m程あって案外に大きいことがわかります。また、現在の銅板を止めた釘以外に多数の角釘穴（下写真：四角印の所）が見つかりましたが、これにより、この大棟が江戸時代に作られたものと言えるでしょう。



降棟、隅棟の銅板取り外し
大棟同様に降棟と隅棟の銅板を取り外しました。



隅棟の取り外し 周囲の板と骨組を取り外すと、屋根が出てきました。
次は降棟を取り外します。



大棟の経の巻3本を取り外したところ、鬼板との仕口（^{しぐち}組み合わせた部分）の中から「寛政九□ / 七□ 十□（あるいは「吉」か）」と書かれた墨書が見つかりました。

^{1 7 9 7}寛政9年は本堂が建立された^{1 6 9 8}元禄11年から数えて99年目になりますが、大棟廻りの修理がこの時にあったことがうかがえます。また光明寺には

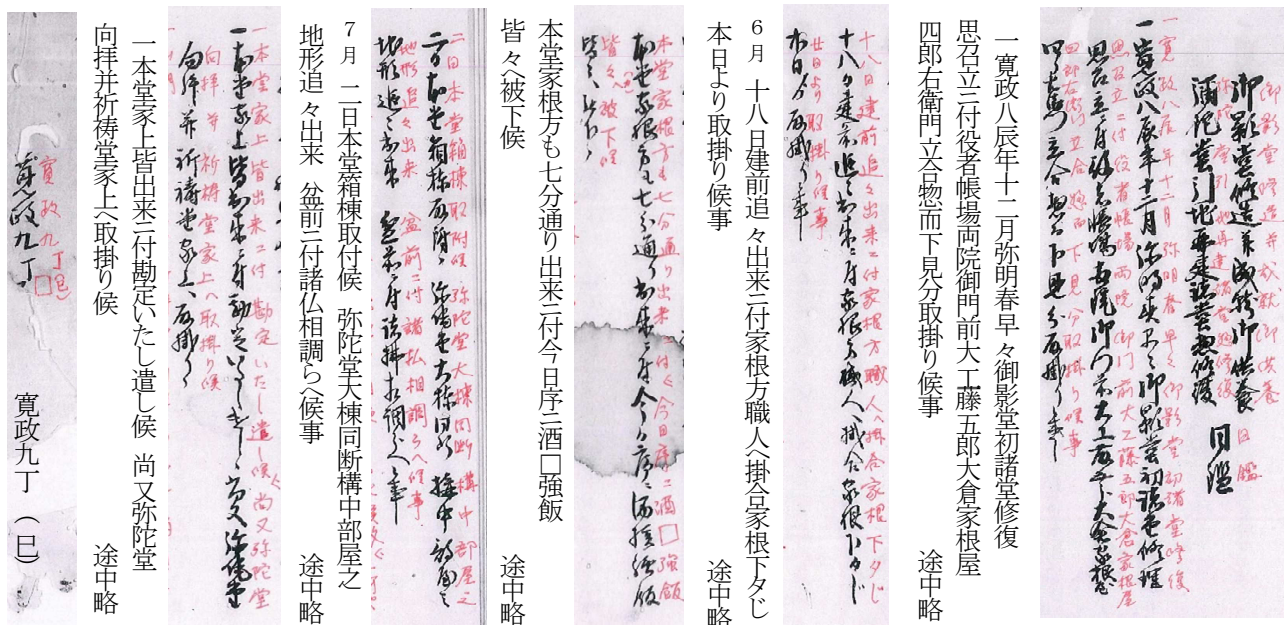
「御影堂修造並成就御供養 弥陀堂引地再建諸堂惣修復 日鑑」

という文書が伝わり、本堂の屋根葺き替えを行ったことが記されていました。仕口の中へは組み立て時でないとは書けませんし、経の巻を取り付けた跡も一致していましたので、寛政9年に屋根葺き替えとともに大

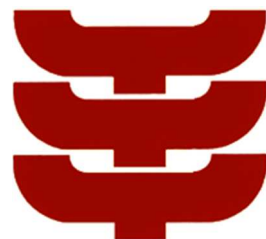


棟全体も作り替えた、と言えます。大棟南端鬼板の3本の経の巻の下側 中央経の巻の仕口の中の墨書

「御影堂修造並成就御供養 / 弥陀堂引地再建諸堂惣修復 / 日鑑」から抜粋



文化財建造物の保存活用修理工事では、古文書や古写真といった資料の調査も合わせて行い、これらからわかったことを関係づけながら、建物の歴史をより明らかにしようと努めています。



本事業は文化庁の保存・活用事業費補助金とともに神奈川県及び鎌倉市からの補助金を得て実施しています